



月(宇宙)にvillageを作ること
—文化人類学からのアプローチ—

岡田浩樹

(神戸大学国際文化科学研究科)

本日の話題提供の出発点

- Moon Village人文社会部門

二つの困難な課題(期待)

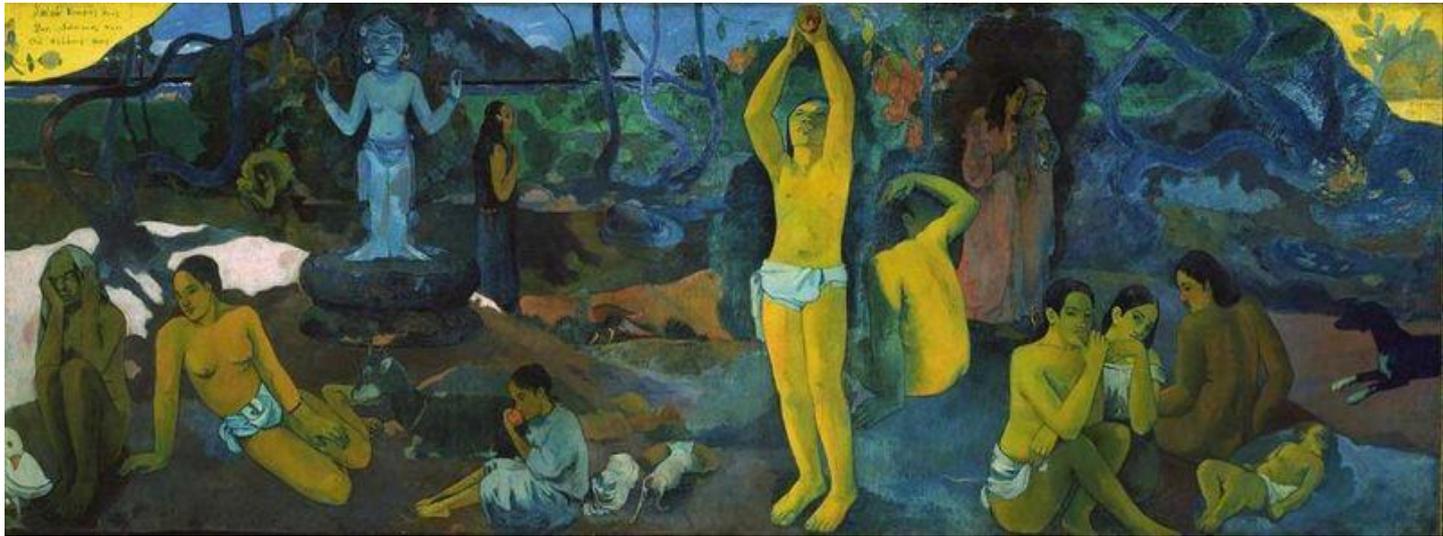
(1) 短期間の課題: 直近の月コミュニティの社会・文化をどのように設計するか

(2) 人類が月(宇宙)に生活基盤を構築する際にどのような方向性・可能性があるのか

両者の間に横たわる現代社会の課題、閉塞感

宇宙を知ることの意味

D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous?



現代の宇宙探査の目的 (Global Exploration Strategy, 2007)

“Where did we come from?

What is our place in the universe?

What is our destiny?”

本日の話題提供の内容

0 宇宙研究と(文化)人類学

1. 長期的スパンでの人類の社会・文化の問題
2. 「月(宇宙)に村(組織・共同体・社会?)」を作る際に検討する際の分析枠組みと検討プロセス
3. 地上の人類社会・文化の多様性と可能性

0: 宇宙研究と(文化)人類学

文化人類学: 人類の社会・文化に関する経験科学、実証主義的アプローチ

「想像(想像)の対象」とする「宇宙と人類の未来」について現実の社会文化的状況の具体例から検討する。

(1) 人類文化の多様性に関する民族誌的資料の活用

(2) 「異文化というレンズ」→ 自文化の対象化、客体化という人類学の手法、

→ 宇宙というレンズを通して現在を対象化し、未来を構想する。準拠枠としての「近代」「近代性」の相対化

文化人類学者と宇宙

文化人類学の一般的イメージ

非西欧社会を中心に「未開社会」「前近代社会」(発展途上国)を研究対象とし、フィールドワーク(現地での長期住み込み参与観察)によって、個別の文化の様態を明らかにする分野

なぜ、人類学者が宇宙なのか？

→人類学の問い:個別の文化理解、人類文化の理解(人類とは何か?)

フィールドと理論との往還:「経験科学」帰納的アプローチ

Cf.伊勢田・神崎・呉羽『宇宙倫理学』昭和堂2018年

文化人類学における宇宙研究 (先行するUSA,Europeの宇宙研究)

- Olson, V. A. (2010). **“American extreme: An ethnography of astronautical visions and ecologies.”** PhD diss.

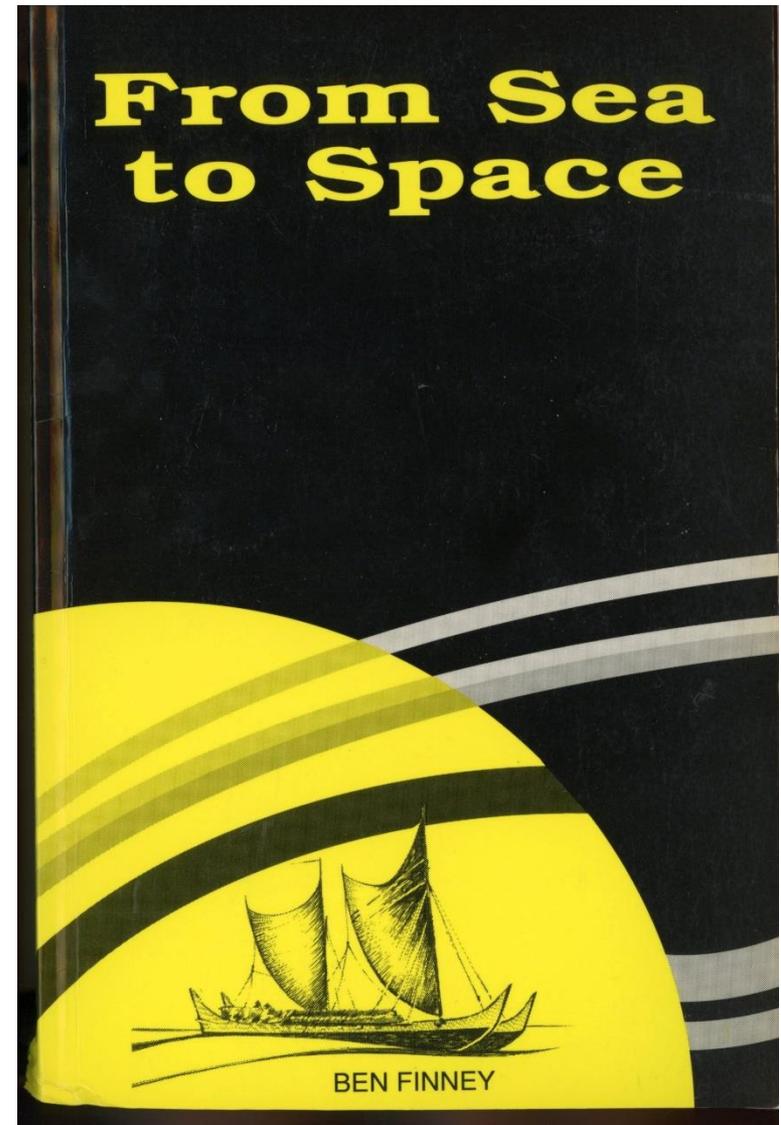
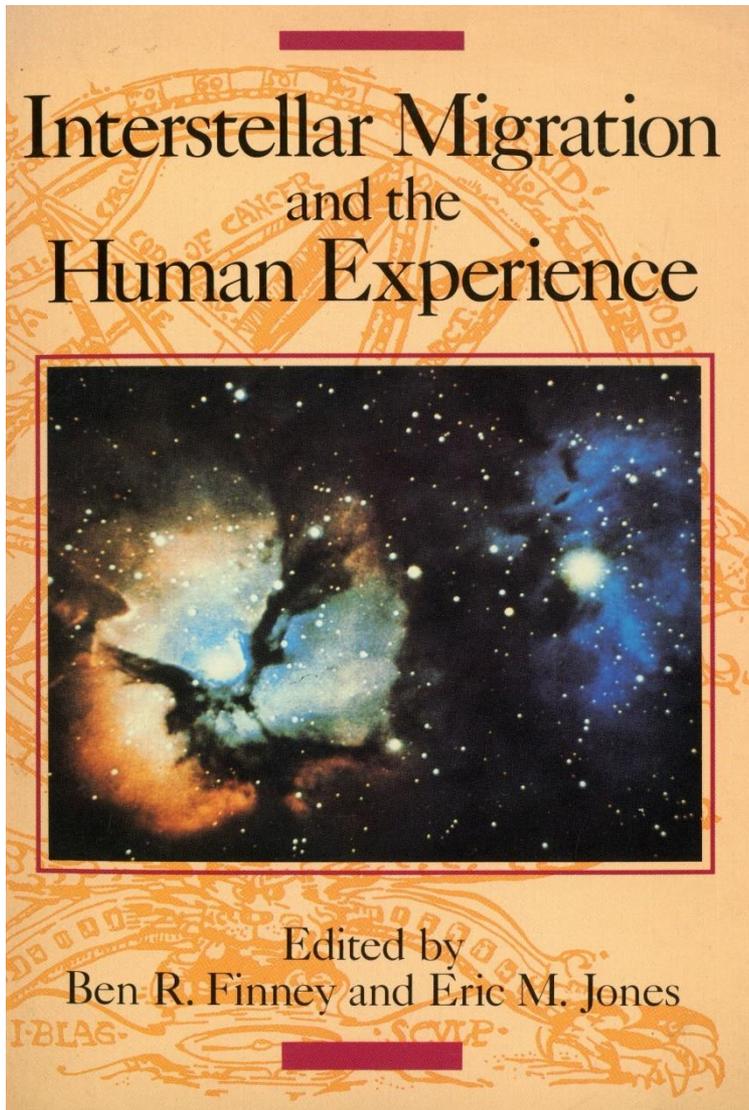
In referring to space as an "extreme environment," interlocutors were not only signaling its categorical status as a limit-case, but also the extent to which **"the extreme" is regarded as a vittal sitte (a place or condittion) in which essential truths and proofs emerge.**(Olson 2010: 7)

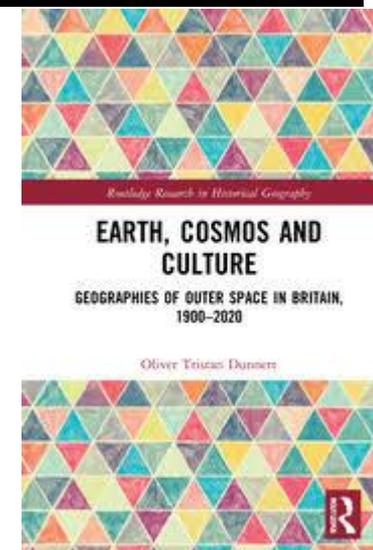
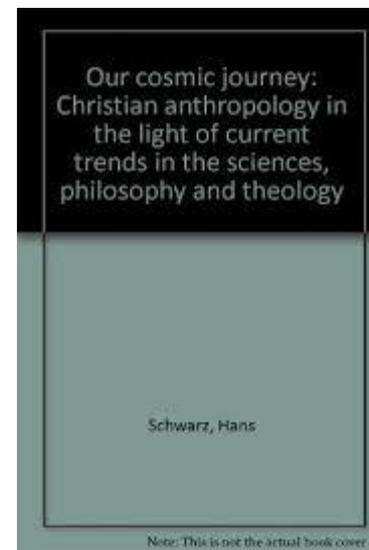
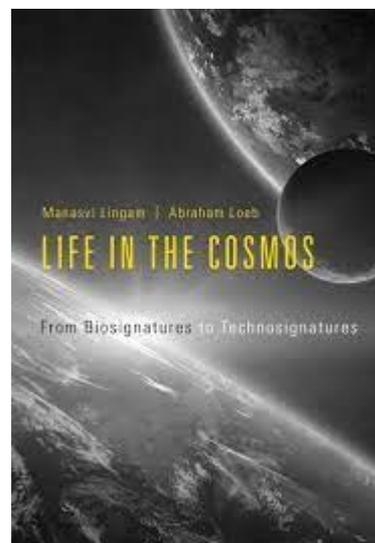
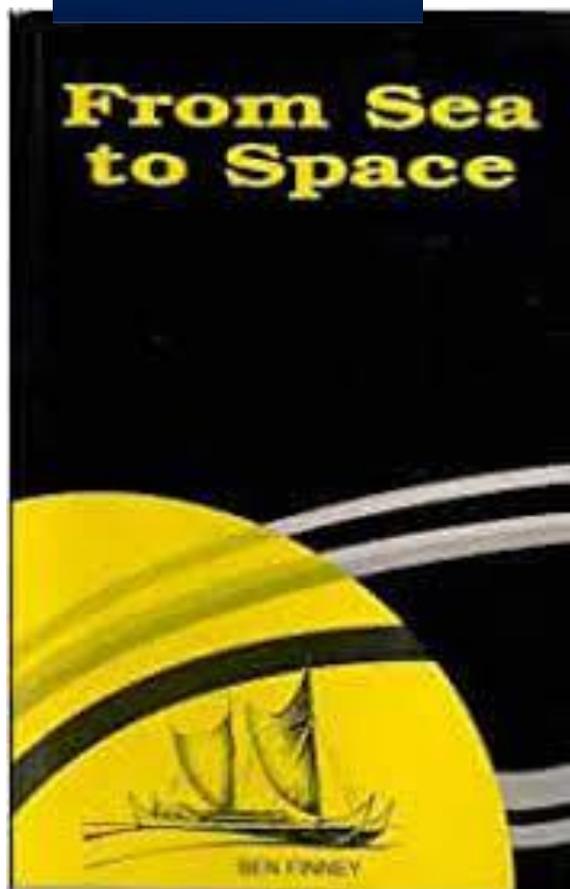
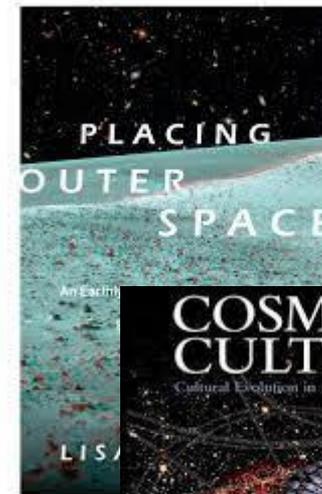
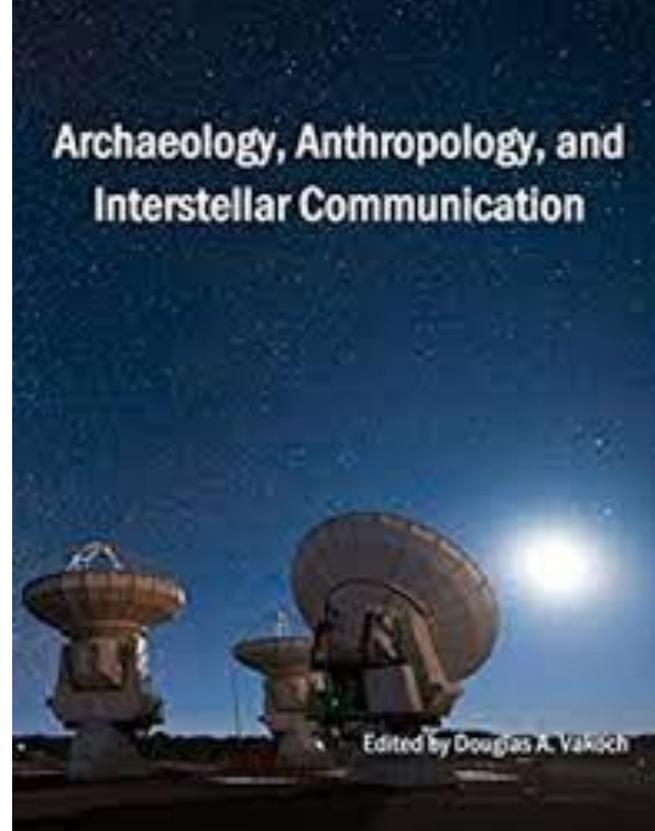
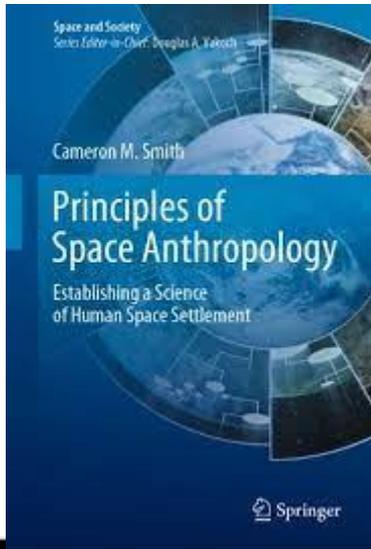
- **“Extreme: Humans at Home in the Cosmos”**
(Anthropological Quarterly, 2012, Vol.85, No.4.)

宇宙飛行士のフィールドノート分析／科学人類学研究のフィールドワーク／地球外移住希望者、等。

- Michael P. Oman-Reagan, *Unfolding the Space Between Stars: Anthropology of the Interstellar*
 - Setha 2003 M. Low *The Anthropology of Space and Place* (Wiley Blackwell Readers in Anthropology), Wiley-Blackwell
 - Pauline McKenzie Aucoin 2020 *Toward an Anthropological Understanding of Space and Place*, Concordia University(博士論文).....
 - この他、宇宙関連施設と現地社会の関係、宇宙環境における社会・文化の問題(例:多文化状況など)、テーマは多様化。
 - Cf.宇宙空間における「小社会」の成立:ガバナンスの問題、新しい価値の創造(木下2009:6-10)
- 宇宙法学、宇宙政治学、(宇宙)心理学、宇宙社会学、宇宙考古学、宇宙芸術など、宇宙をフィールドに据えた研究は2000年代以降活発化
- 多様な人文社会系分野の取り組み:19世紀末の状況:Anthropologie「人間学」の議論と類似(近代社会、科学技術との対話:人間とは何か)

Ben R. Finney: NASA projectへの参画





- **James T. Struck** Some Anthropology of Humans in Space. Can Human Stability Provide Some Support for Non-Evolutionary or Religious Concepts? Are we able to Speak of a Homo-Astronomicus or a Human Group Involved in Space Travel? What Happens to Humans in Space? (ID-0135)NASA
- 宇宙における人間の人類学。人間が(宇宙で)安定することは、「非進化」、「宗教」といった概念をある程度サポートできるのだろうか？ 宇宙旅行に携わるホモ・アストロノミクス(宇宙人類)や人間の集団について語る事はできるのだろうか？ 宇宙で人間に何が起こるのか？

<https://solarsystem.nasa.gov/studies/2/some-anthropology-of-humans-in-space-can-human-stability-provide-some-support-for-non-evolutionary-o>

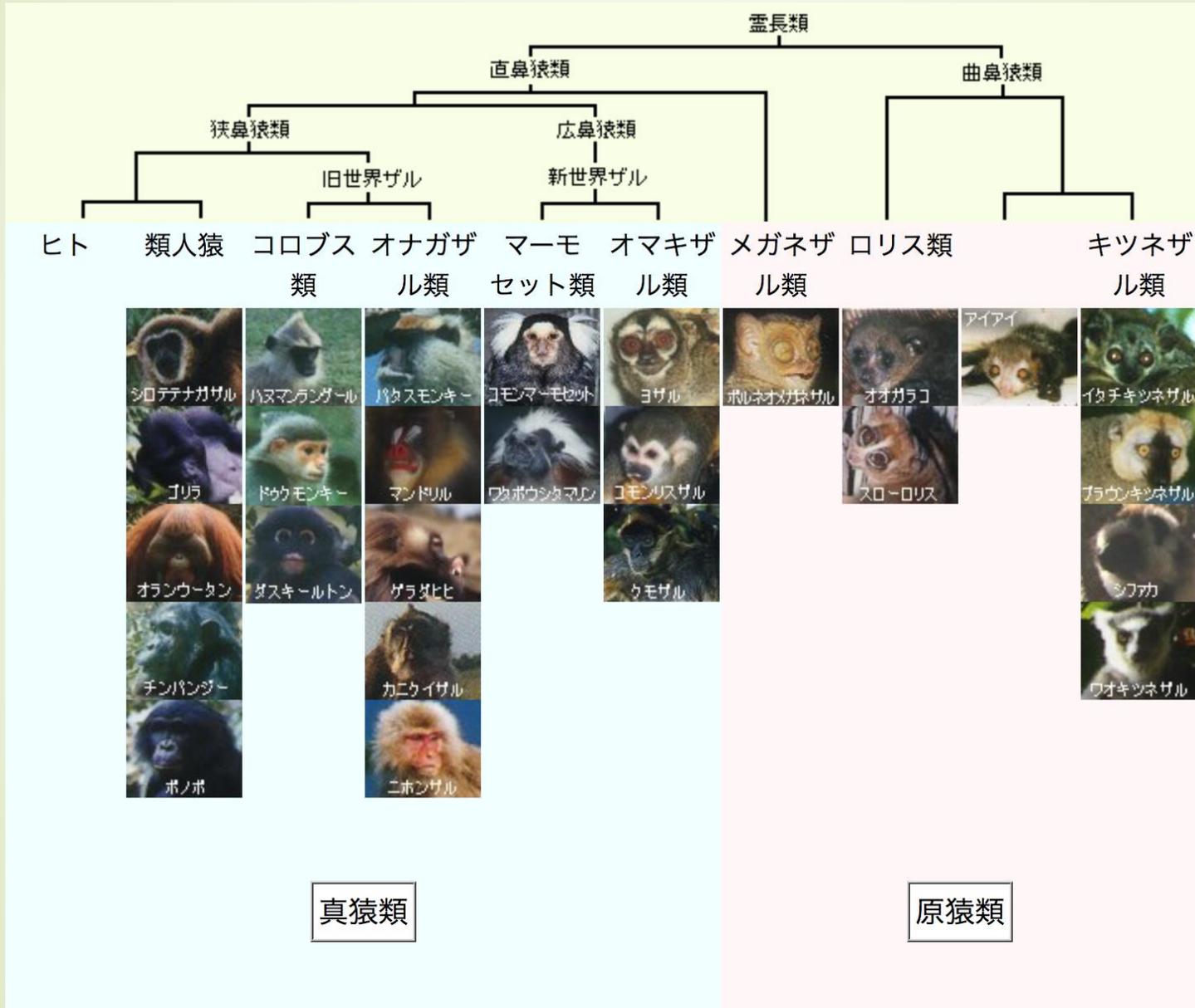
(cf. 心理学) Suedfeld et al.(2010) 'Changes in the hierarchy of value references associated with flying in space,' Journal of Personality: 78(5).

▶ 1. 長期的スパンでの人類 の社会・文化の問題

霊長類の進化

- 霊長類様哺乳類の出現
 - 白亜紀末期（6500万年前）
 - プレシアダピス類
 - 始新世末に絶滅
- 現代型霊長類の出現
 - 始新世末（3500万年前）
 - 北米からヨーロッパ

霊長類の分類



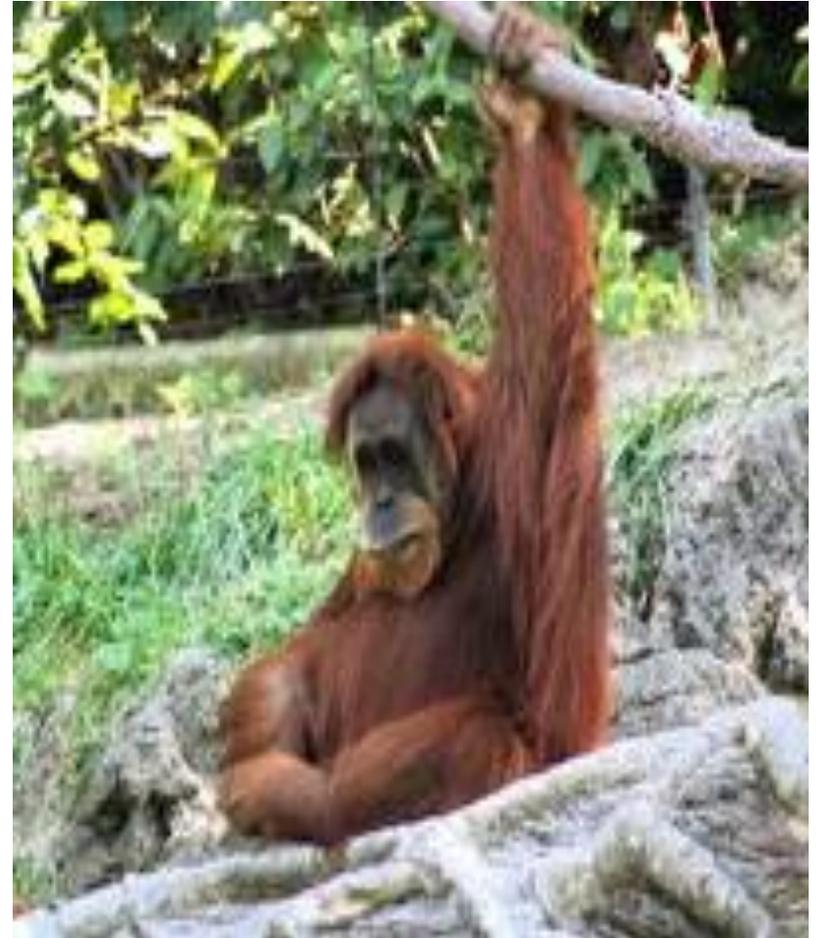
動物社会の母系（ニホンザル）

- ▶ 文化人類学の母系とは少し異なる
- ▶ オスは青年期（生殖年齢に達する前）になると群れから出て、他の群れに加わる
- ▶ インセスト（近親相姦）回避のため
- ▶ 群れの中核をなすのはメス
- ▶ （参考：ハーレム：メスの間にだけ血縁関係がある繁殖期に、一頭のオスが多数のメスと繁殖を目的としてつくる一時的な群れのこと。本来は、アラビア語でイスラム社会における女性の居室を意味する。）



オランウータン科

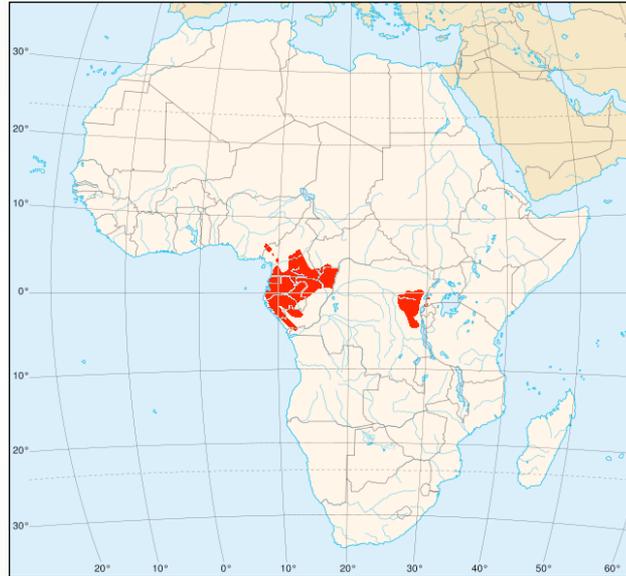
- オランウータン属
 - スマトラオランウータン (*Pongo abelii*)
 - ボルネオオランウータン (*Pongo pygmaeus*)
- ほぼ完全な樹上生活者
- 単独性が強い
- ただし、完全な単独性ではない
 - 3~7頭が同時に同じ木で採食
 - 連れだって移動
 - 緩やかなつながりをもつ社会を形成



ヒト科

- チンパンジー亜科
 - ゴリラ属
 - ゴリラ
 - チンパンジー属
 - チンパンジー
 - ピグミーチンパンジー（ボノボ）
- ヒト亜科

ゴリラ



🐼 体長 1.2-1.8m

🐼 体重 135-220kg

ゴリラ社会

- 繊維性食物を中心とした雑食で、温和で繊細な動物
- 1頭のオスと複数のメスや子供たちから成る10頭前後の集団
- オスもメスも思春期に達すると生まれ育った集団を離れる
- メスだけが他の集団へ加入
- オスは顔見知りのメスを連れ出すか、単独生活をした後、他集団からメスを誘い出して自分の集団をつくる
- オスもメスも一生の間にさまざまな仲間と社会生活を組み替えていく
- ゴリラの集団はなわばりをもたず、多くの集団と多様な関係をもって暮らす

チンパンジー

- 主な食性は植物食
 - 主に果実食
 - 葉・種子・樹皮・堅果・根等
- 肉食もおこなう
 - 集団で狩猟をおこなう
 - 肉の分配をおこなう
- 20～100頭程度の複雄複雌からなる社会的集団を形成
- メスは一般的に出産可能な年齢になると、生まれ育った集団を離れ、他の集団に移り、そこで子供を産む
- オスは出自群に留まり、大人のオス同士の強固な連帯を形成しすることで集団を維持する複雄複雌の父系集団



文化人類学と技術・科学

神学

哲学・宗教学・文学・(歴史学)

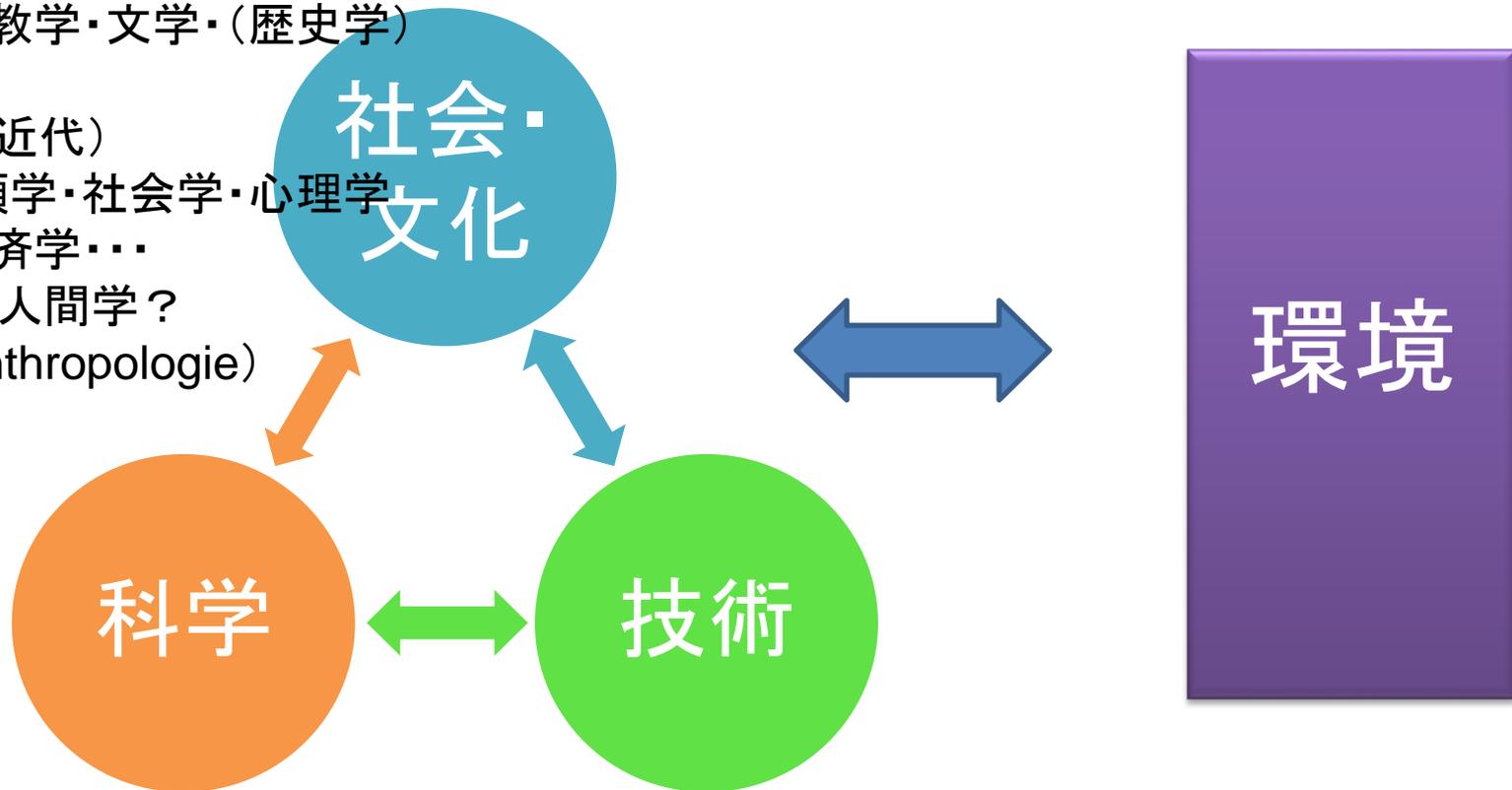
19世紀(近代)

文化人類学・社会学・心理学

法学・経済学...

→新しい人間学?

(Die Anthropologie)



二つの文化の区別

自然人類学、文化人類学でいう「文化」は一般的に使われている「文化」とは異なる
広辞苑の説明では、

①文徳で民を教化すること。②世の中が開けて生活が便利になること。文明開化。③(culture)人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展のニュアンスが強い文明と区別する。↔自然。

であり、一般的文化は①と②、文化人類学はやや③に近いが、より広く人類の精神的・知的な活動に関わり、人類の特徴の一つ。

2種類の文化

(1) 大文字の「文化」 : CULTURE: 人類全体の特徴としての「文化」

(2) 小文字の「文化」 : culture: 環境や歴史的過程で個別社会に生み出されたローカルな文化

自然人類学は(1)、文化人類学は(2)を通して(1)を考察しようという分野

人類社会の「転換期」

▶ 一般には、21世紀の宇宙への進出は、「大航海時代」に例えられる。

▶ しかし、人類史的に環境と社会・文化との関係で3つの大きな転換点がある

(1) 旧人類の「出アフリカ」 (Great Journey)

→ 人類の特徴：Homo mobilitas, 社会・文化の多様性

(2) 農業革命

定住コミュニティ (共同体)、都市、国家の形成、環境への主体的関与

(3) 産業革命 (「社会」の登場。近代化→グローバルイゼーション)

環境への抜本的関与、文化社会の標準化

宇宙時代のコスモポリタンは近代・グローバル化の延長にあるのか？

新人：完成されたホモ・サピエンス

- 3万年前から後の人類が新人
- 世界中の多くの地域で化石が出土しているが、それらの形態特徴は現代人そのもの
- 出土した化石はその地方の現代人とほぼ変わらない
- 人口は、地球上の全グループを合計しても1000万人程度
- 様々な集団の移動、拡散、接触が繰り返され、人類の分布域が拡大
- 特筆すべきは、モンゴロイドによるシベリア、南北アメリカ、太平洋の島嶼部への拡散
- 人類の分布しないところは、南極と高地だけとなる。

→文化による適応で拡大・増加してきた人類が宇宙に進出すると何が起きるか？

人類とは何か？ 一様な人間観一

- 人間の学名である「ホモ・サピエンス」Homo sapiensとは、ラテン語で「賢い人間」
- 人間の様々な特徴から
 - ホモ・ファーベルhomo faber.
人間の本質は物をつくりおのれを形成する創造活動であるとして「作る人」（フランスの哲学者H. ベルグソン）
 - ホモ・ルーデンスHomo ludens
人間のさまざまな活動の中に遊びの精神がいかに深く根付いているので「遊ぶ人間」（オランダの歴史学者ホイジンガ）

ホモ・モビリティスHomo mobilitas,

- 人間ほど広い地域を動き回るものはいないので「動く人間」
- 人類の歴史を見れば、アフリカに局在する熱帯動物から、南極と高地を除いた全地域で活動する動物へ進化
- 二つの大きな拡散現象
 - Out of Africa 100万年前のころアフリカから広くユーラシアに分布を広げた
 - Out of Asia 7万年前の最終氷期に、東アジアからオーストラリア、ニューギニア、そして極北地方から南北アメリカ、最終段階で太平洋の島嶼に拡散

アジアからアメリカへ

- アメリカ先住民の祖先はモンゴロイド
- シベリアの最果てから、アメリカの西端であるアラスカを經由する陸上ルートで移動
- ウィスコンシン氷期（7万5000年前～1万4000年前）海退現象のため海水面が低下し、ベーリング海峡はアジアからアメリカに広がる大平原ベーリンジア（ベーリング平原）
- ベーリンジアは、マンモス、バイソン、トナカイ、ウマなどの大型哺乳類が豊富に生息する草原
- 最初のアメリカ人は大型哺乳類を生活の糧とする「マンモス・ハンター」で、動物を求めてベーリンジアに移動と推定
- 1万2000年前頃メキシコまで北米一帯に分布

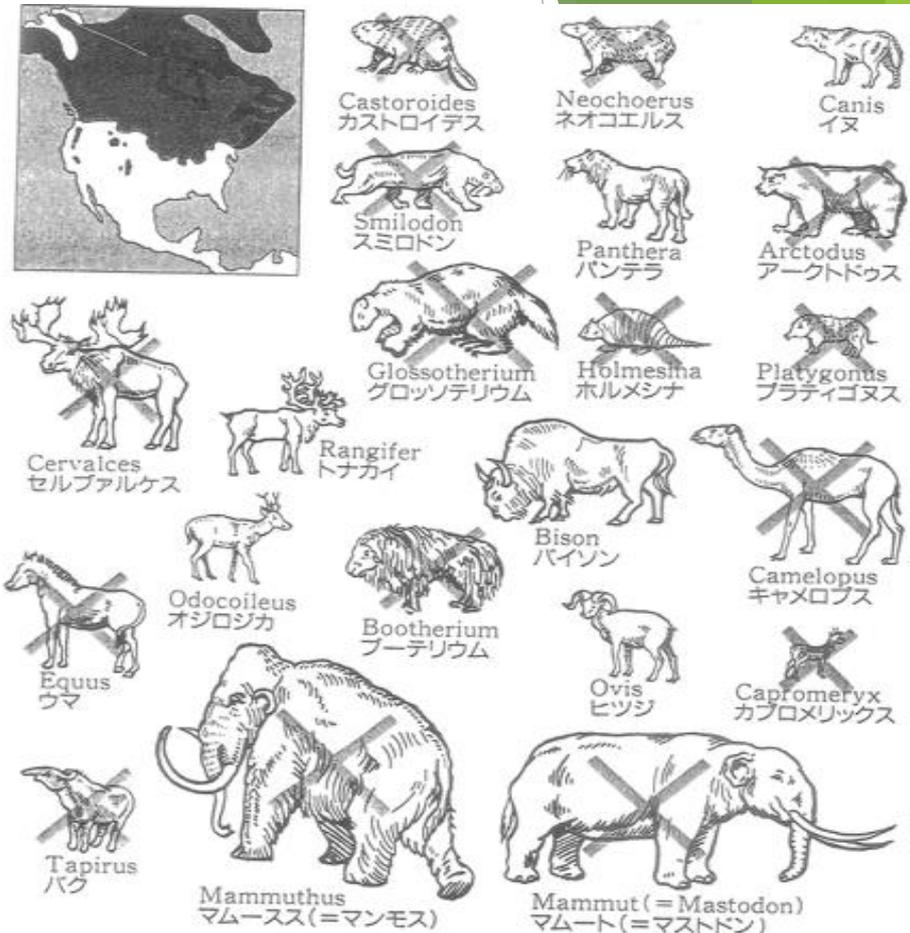
パタゴニア行きの超特急

- ◀ 1万1000年～1万年前の遺跡がグアテマラからエクアドル、チリ、アルゼンチの各地に点在
- ◀ 南アメリカ最南端のパタゴニア地方のフェゴ島で1万500年前の遺跡
- ◀ モンゴロイドのグループは1000～1500年で南北アメリカ大陸を縦断して拡散



最初の自然破壊

- ← アメリカ大陸の大型哺乳類が、最初のモンゴロイドの拡散と同時期に大量に絶滅
 - ← この時期は激しい気候変動
 - ← 絶滅が気候要因か、人為的なものかは断定できない
 - ← ただ、当時の遺跡からはマンモスなどの絶滅種の遺骸が大量に発見される
 - ← 最初のアメリカ人の狩猟圧は、大型哺乳類の絶滅の一つの要因となったのは間違いはない。
- Cf. 宇宙への進出は、宇宙の破壊をもたらす？ (フリーマン・ダイソン)



Great Journeyがもたらした多様な社会と文化

環境に応じた文化的適応と多様な文化の派生
コミュニケーション能力の発達とコミュニケーションの多様化

一方で、農業革命以前は、小規模で誘導的な集団

第2の転換点

- 農業革命以後の社会の多様化、複雑化、
- 定住コミュニティ（共同体）の明確な形成と大規模化

第3の転換点：産業革命

- ▶ 環境への意識的介入・改編
- ▶ 生活様式の標準化と「再現」
- ▶ 「社会」の発明

近代的社会概念の創出

(17世紀中旬：近代化の急速な進展：科学技術のブレイクスルー、同時に戦争と革命の「機器の時代」)

→「新しい社会」の概念：ホッブス・ロック、スピノザ、ルソー

ホッブズ、ロック：人間がその中に生まれる所与の環境としての社会→人間がある種の必然性によって形作る「一制度」、国家および社会は人間が意図的に形作る作為

近代的社会

考察の出発点は、事由で平等な個人、固有の権利としての自然権を有する個人の前提

社会の参照枠は、常に国家、社会は国家と同じ広がりを持つ存在として規定

「発明された社会」の「発見」18世紀

社会が国家や政府とは明確に区別される厚みを持つ空間。それを治め、秩序と平穩をもたらすことが重要なある種の具体的な「空間」として認識→社会概念の実体化

経済社会の実態化と発展、公共圏の拡充→市民社会の形成

二つの社会のベクトル：国家による管理と調整の対象としての社会（フーコー「統治性」）

と、

国民各自が個人的な利益を追求、共同で善を実現する「共有の空間」としての社会

人類の社会・文化をめぐる「展開」から見た 「Moon village」の問題点

- ▶ 錯綜する議論と多様な方向性の可能性
- ▶ Villageをどのようなレベルでとらえるのか
 - (1) 集団（家族、群れ）
 - (2) 共同体
 - (3) 組織もしくはアソシエーション
(下位会集団)
 - (4) 社会（近代の社会概念）
 - (5) ポスト近代社会（新しい社会の創造）

2: どのようにvillageを作るか

「月(宇宙)に村(組織・共同体・社会?)」を作る
際に検討する際の分析枠組みと思考チャート



現段階の条件設定 (Moon village Project)

月面上に、1000名の「村」を建設する(仮定)。

→居住環境だけでなく、いかなるcommunity(社会)を設計し、そこでの「文化」を構想するか。

文化をめぐる二つの次元の区分

「CULTURE」:大文字の文化(人類文化)

→生物学的適応を含む総合的、長期的適応の形式としての文化

「Culture」:小文字の文化(localな文化)

ここでの「文化」とは、いわゆる芸術などの「High culture」ではなく、言語・非言語コミュニケーション、生活習慣、無意識の身体動作、価値観、行動規範など、人間を他の生物と分かち、社会を形成・存続するための、環境に対する独特の適応形式

→当面の環境に適応するための地域的、短期的適応としての文化

留保する条件

Human-machine interfaceの変化
あるいは

身体的変化、遺伝子的変化を含む生物学的適
応

ロボット技術やサイボーグ技術や社会・文化の
枠組みを変えるような状況については、別の
思考実験とし、今回は取り扱わない。

いわゆるポストヒューマンの問題。



理念／実態

理念：イデオロギー、宗教、ユートピアからの「かくありたい」というイメージ→規範、ノルム、



↑
制度、法、文化的装置

技術（社会的も含む）

↓
実態：現実の状況、環境でとらざるを得ない**実態**



宇宙という生活世界についてのイメージ

「宇宙生活世界」のimage

ユートピア・夢
宗教・世界観

生活のリアリティ
歴史的背景

技術のinnovation

科学的探求

課題

A.地球上の生活を宇宙空間(具体的には月、火星)に再現しようとする、

1. 解決しなくてはならない技術的問題は何か？
2. もし解決できない場合、どのような変化が起こりうるか？

B.地球上とはまったく異なるcommunityを宇宙空間に「創造」することは可能か？



Communityのイメージ

- ・地上の生活空間をそのまま移植し、再現版、ミニチュア版を月面上に再現するのか？
 - ・地上のローカルコミュニティの在り方をそのまま再現するのか（communityの多様性。日本社会におけるcommunityのイメージ）？）の後
 - 現実／理想・ユートピア・モデル
- cf. 宇宙船「地球号」のイメージの相違
- Cf. 東日本大震災の「復興」とポストコロナ、人新世
- SDG'sの問題



人類学的視点と時間軸

コミュニティ単位での社会・文化適応、発展を想定

(家族形態はコミュニティ(社会)との相互関係で形成される)

短期: コミュニティの再現

地上の機能的(目的的)組織・システムの再現

Human machine interfaceの組み込み

宇宙空間の環境操作

中期: コミュニティの構造化(システム化)

宇宙コミュニティにおける独自社会・文化形態

地上の多様な社会・文化の適用

長期: 形質人類学(自然人類学)的变化

環境に適応した身体的変化と多様性の発生

→多様性を組み込んだ社会・文化への改編

→人類進化(Neo Homo sapiens)

前提となる検討条件

1. 1000名の「村」について1. その規模を維持しつづけるか
→プロトタイプとなるコミュニティの形成、これを基盤とした拡大
2. 規模だけでなく、拡大・発展を前提とするか
→拡大・発展を前提とする。
3. 当初設定から拡大・発展の条件を含むか
当初計画から拡大・発展の条件を含みつつ、段階的に拡充。



コミュニティ形成のプロセスとプロセスと最終目標 (1)

0. Action group: コミュニティのインフラ形成作業グループ
 1. Action group: (単一の機能的・職能group) 小グループの居住
(一時→継続的)
 2. Action group→community: 複数の機能が異なる小グループ
の併存(サポート、生活空間化)
世代を超えた継続への展開
 3. Community: 分化したsectionを備えた複雑な生活共同体(世代・
家族をない方)の形成、village(1, 000名)
生活世界の形成と生活基盤の移動。
- * 1000名規模は、地上での中規模の村レベル

発展Processと最終目標

1. (単一の機能的・職能group)小グループ:観光、資源開発、研究開発
2. 複数の小グループの併存(サポート、生活空間化)
3. 分化したsectionを備えた複雑なcommunity(世代・家族)の形成
village(1,000名) 生活世界の形成
* 1000名規模は、地上での中規模の村レベル
4. Town(10,000名)
火星や小惑星、アステロイド開発の基地化、ターミナル化
5. City level(100,000名)
地球から太陽系開発のHUB化
(環境の安定性から、やがては火星にHUBが移動?→外宇宙??)

生活空間としての完結性の設定

生活空間として完結することを目指す。

あるいは、完結性の程度や種類

生業の場／生活の場（衣食住、労働と余暇）

完結性の内容・条件



生活空間としての完結性

生活空間として完結することを目指す。

あるいは、完結性の程度や種類

生業の場／生活の場

Ex. 観光地、ニュータウン、自給自足

→こんなところにポツンと一軒家は家屋の所在地の在り方にすぎない。完全に社会から孤立した一軒家は存在する？

経済、社会、政治の自律性、

下位文化の形成

心理的「自律性」: アイデンティティの形成

Communityの性格

非自立性(非自律性)か、自立性(自律性)か
→政治的な単位としてではなく、経済的、社会的な自律性(自立性)とその程度

→これによって文化的自律性が大きく変わる。

バリエーション、理念

仮定を置いて整理する。

人類の知的能力の限界(脱地球化)を探る

地球との関係性(下位社会か、独立社会か)

居住形態変化のprocess

1. 一時的な居住(短期一時滞在)
2. 世代を超えない、交代居住(中期)
家族帯同？
3. 世代を超える長期居住
 - 生殖、家族の形成
 - 1世代20年を前提とした世代交代とcommunityの連続性



「設計主義」か「ゆらぎ」か

近代建築・都市計画のモダニズム（設計主義）

目的的功能集団 (action group) ・組織 (corporate group、organization) から、

「コミュニティ」「社会」への展開には何が必要か

Cf. communityの生物学的アナロジー（類比）

19(20世紀)的有機生命体論から、20(21世紀)的生命システム論へ

「設計外」に対応できる「余白」の設計

宇宙という生活世界についてのイメージ

「宇宙生活世界」のimage

ユートピア・夢
リアリティ
宗教・世界観

近代における生活の
歴史的背景

近代社会のイメージを超えることを目指すのか、
あるいは超えざるを得ない状況があるのか
→システム設計における揺らぎの想定

環境への関与

環境適合／環境改編

近代以前：

環境に適応する形でcommunityの在り方、それに対応した技術発展

近代以後

環境自体を改編、設計する思想。環境に作用し、改編する「技術」革新

→月環境の改編(テラフォーミングは困難だが、クレーターなどを利用した大規模な人工的環境形成)



帰納的(経験的)アプローチか、 演繹的アプローチか

実際のデータから組み立てる帰納的アプローチは現実的であるが、状況対応的であり、時として技術のインボリューション(退化)とガラパゴス化を招く可能性

技術的イノベーションや社会・文化の大規模な変化は、演繹的アプローチが出発点となる。



3. 人類の多様性とい



- あらたな文化相対主義の挑戦

近代社会(現代日本社会)を月(宇宙)に再現しようとするときに、どのような問題が起きるか。

コミュニティレベルだけでなく、家族関係、社会関係においても、現代日本社会の「イメージ、理念」の再現は可能か？

→歴史的な地上のフロンティアに発生する多様性、多様性に対する受容(寛容)の問題





アラスカ ヘアー・インディアン

北アサパスカン文化圏に属する諸部族の中で、彼らほどウサギに依存しているものはないようだ。ムースやカリブなどの大型獣がまわりの部族におけるほど豊富でないからである。しかも、このウサギの数が周期的に変動し、その周期の谷間の年には餓死者も出るといった過酷な自然環境。

食料源の貧困ゆえに約9万平方キロ(日本の本州の四分の一弱)の地域に300ないし500人の人口を維持するのが限界。しかも乏しい食料を求めて、少グループに分かれて分散してキャンプし、常にテントの移動を余儀なくさせられる。そして、身軽に移動する要請から、ものを持たぬ生活に徹している。気温は、1月、2月がもっとも低く、氷点下40度から45度というのは普通で、ときには氷点下50度に下る。そして、北西風によるブリザードのため外出不能となり、終日テントの中で過ごさねばならぬ日々も稀ではない。食料獲得のためのエネルギー効率ならびに餓死者や老人遺棄の発生頻度といった基準に基づけば、ヘアー・インディアンは、世界でもっとも過酷な生活、ないしは、極限の生活をしている民族。

原ひろ子 1989 『ヘアー・インディアンとその世界』 平凡社

ヘヤー・インディアンの社会では、親は親、子は子という意識が強い。親子の繋がりは希薄で、「生まれた子を育てなければならない」という考えは強くない。夫婦の関係も同様に希薄である。

そのため、妻が夫以外の男と子どもを作り、生まれた子をためらく養子に出すということがよくあり、とがめられない。

なお、子どもがいると和む、という価値観があるため子どもは不可欠である。そのため、自分の子どもが大きくなると他に養子を取ったりする。

養子は生みの親をしっかりと認識してもいる。このことは①近親相姦のタブー②子どもが生まれたら生みの親やきょうだいに知らせる義務があること③死者を埋めた人とその父母、きょうだい、配偶者は話してはならないということ、の3つの決まりから明白である。

ちなみに、養子ではなくとも家出は頻繁に見られる。ヘヤー・インディアンの価値観の根本には、人は守護霊との付き合いで生きている、というものがあるので、相互に強くは干渉しないので、これをとがめることはない。

ヘヤー・インディアンは移動民族であるが、大人たちの人間関係が嫌になると衝突が起こる前にあっけなく移動をする。その際、子どもたちの友人関係などは無視される。子どもは友達と離されたショックを受けるが、大人たちは外に連れ出すなどして癒す。

近代社会の想像力を超えて

- 数万年を経て多様化した人類社会・文化の「財産」(人類学の民族資料Ethnographic data)の蓄積(消滅の危機にある言語、社会、文化の遺産)
 - 人類学、歴史学、民俗学的知
- ↓
- 地上の「近代社会」の再現を超えた宇宙での生活への想像力の基盤

歴史的に人類の重要な食料源であった 昆虫食→宇宙食



HRAF fileの応用

- Human Relation Area Files
- OCM(Outline of Cultural Material : 文化項目分類) と OWC (Outline of World Culture : 地域・民族分類)
- イェール大学が編集した人類学の資料。1949年開始。1976年第1版
- <https://hraf.yale.edu/>
- https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/58/2/58_KJ00004841767/_pdf

おわりに: 長期的アプローチ: 宇宙環境居住(宇宙移住)が人類にもたらす変化・進化の問題、人類の多様性

「拡張する人間の精神」(仮説)

認知人類学の成果:

人類の認知過程が個々の身体に閉じ込められているのではなく、道具や協力する人々、改変された環境を巻き込む人間／非人間のハイブリッドなネットワークとして成立

→ 多様な環境への適応を可能にする(ラトゥール1999, 2008)

→ 短期的にはhuman - machine interfaceの問題

→ 人類進化の上で重要な役割(認知技能の発達)

→ 人類の宇宙進出もこの延長上

→ 「状況認知」(Lave2011), 「分散認知」(Hutchins1996) 「拡張した心」(Clerk1997, 2008)

大村敬一2014「未来の二つの顔—宇宙がもたらす生物=社会・文化多様性への扉」、岡田

ibid.14

累進的な文化進化を可能にした人類の創造能力

ベイトソンの学習進化モデルにおける人類の能力

「心の理論」(同種他個体に対し同じように意図や精神状態を
持っている者として理解する能力)(トマセロ2006:5)

(1)「模倣学習」、「教示による学習」、「共同作業による学習」能力

(2)文化(認知技能の様式)学習と創造

→文化の客体化:既存の世界理解、技能を意識化

→「習慣のくびきからの解放」文化を操作、付加、変更

精神の拡張:

グローバル回路と脱着可能な複数の拡張回路

人類の文化進化の過程

人類全体の精神の拡張過程(さまざまなネットワークに
接続可能)、グローバル化はその一つの帰結

環境条件に合わせた脱着可能なオプションとしての多
数の回路(文化)



宇宙空間への進出(居住)と 人類文化の多様化

- 新しい環境に適応した「精神の拡張」
- 身体自体の環境への変化の可能性 (Massali, et al.)



これまでのような社会・文化の多様性だけでなく、生物学的な多様性と社会・文化の多様性が相乗的に複合した生物=社会・化的な多様性への展開

自己(自者)と他者との差異、境界線の見直し

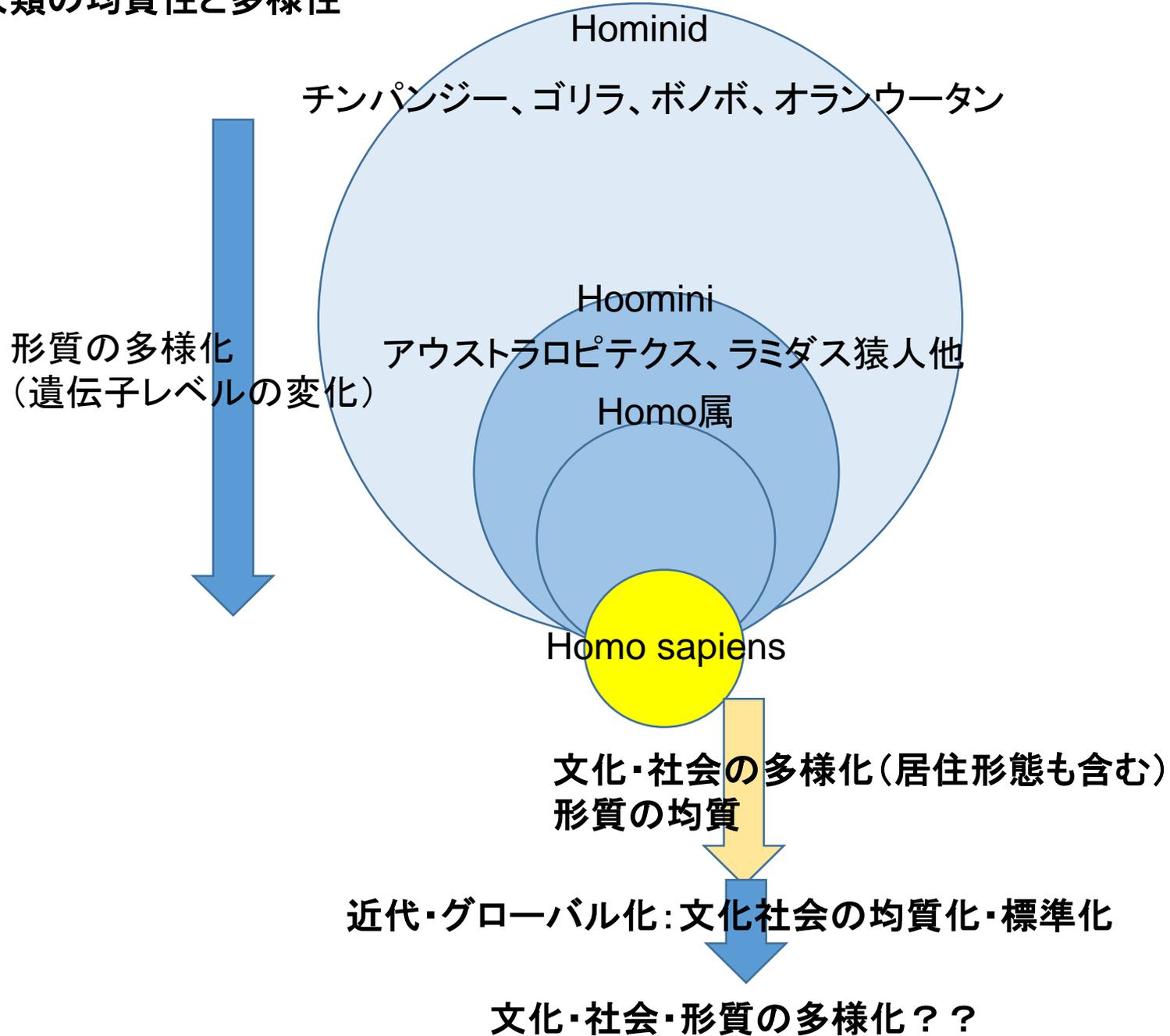
宇宙環境居住が 長期的にもたらす社会・文化

「二つの顔」

- ・「多様な環境に局所的に適応していくことで生じた多様性という顔」
- ・「多様性を超えて交通していく顔」

cf. (グローバリゼーションの「二つの顔」との類似)

人類の均質性と多様性



ご清聴ありがとうございました

- ご質問、commentなどございましたら、
- 下記のメールアドレスにお問い合わせいただけましたら幸いです。
- hokada@kobe-u.ac.jp